

第19回日本放射光学会年会・放射光科学合同シンポジウム報告

実行委員長 竹田美和 (名古屋大学大学院工学研究科)

副実行委員長 曾田一雄 (名古屋大学大学院工学研究科)

第19回日本放射光学会年会・放射光科学合同シンポジウムが去る2006年1月7日(土)から9日(月)にかけて名古屋大学IB電子情報館で開催された。シンポジウム参加者594名(懇親会参加者256名)、口頭発表91件、ポスター発表259件であった。

特別講演では、Joseph Nordgren 教授(スウェーデン、ウプサラ大学)と山下広順教授(名古屋大学理事・副総長)にそれぞれ「Probing electronic structure and chemical reactions by RIXS」と「X線望遠鏡—X線で宇宙を探る」というテーマで講演頂いた(写真1, 2)。これらの話題は、公募で採択された(今回より公募方式を採用)企画講

演でも『共鳴X線発光分光の最前線』と『X線衛星すざく搭載のX線光学系および検出系の現状』として取り上げられた。高輝度放射光源の出現によって進展の著しい高分解能X線分光の一端を伺うことができ、また、最先端のX線光学技術を仲立ちとした宇宙科学分野と放射光科学分野の密接な交流は名古屋地区ならではの企画であった。

企画講演では、上述の2件の他、『コンパクト放射光光源の可能性』、『バルク敏感光電子分光の新展開』、『Top-up 運転の精密実験に対するインパクト』、『タンパク質構造の時間分解解析—4次元構造解析への展望』の4つの企画が採択された。いずれの会場も定員100名~160名の教室を準備した(写真3)が、参加者であふれ、活発な討論のために予定時間をかなりオーバーした会場もあった。また、招待講演として Sunggi Baik 教授(写真4)に「PLS—Gateway to Nano and Bio Korea」と題し、Pohang Light Sourceの最新の成果とともに、本年5月28日から韓国大邱 Daegu で開催される国際会議 SRI2006について紹介して頂いた。

学会奨励賞は、初井宇記博士(分子科学研究所)、山崎裕史博士(高輝度光科学研究センター)、石井賢司博士(日本原子力開発機構)の3氏が受賞され、それぞれ「次世代軟X線発光分光器の開発とその性能」、「完全結晶を利用したX線コヒーレンスの定量的解析」、「強相関電子系の共鳴非弾性X線散乱測定」の受賞講演が行われた。学会奨励賞授与式(写真5)では、今年から賞状の他に副



写真1 Joseph Nordgren 教授の特別講演

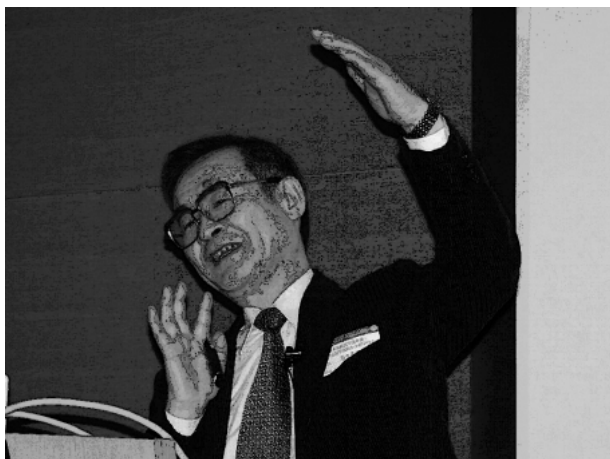


写真2 熱弁をふるう山下広順教授



写真3 口頭発表会場のようす



写真4 SRI2006のChair Sunggi Baik 教授とCo-chair 吉良爽博士（懇親会場で）



写真6 プレゼンテーションスペースでのポスター発表



写真5 学会奨励賞授賞式

左から下村理会長と受賞者の山崎裕史博士、初井宇記博士、石井賢司博士

賞として東京大学物性研究所所属の我が国初の放射光利用専用リングSOR-RING（現在はSPring-8 普及棟に展示されている）と東京大学原子核研究所に設置されていた電子シンクロトロンES（残念ながら解体され記念碑のみが残る）から発生した放射光を用いて測定されたArの吸収スペクトルとをあしらったメダルが授与された。どちらの装置も東京都田南市（現西東京市）にあったもので、日本（世界）における放射光科学のパイオニアたちが築いた画期的な光源装置と成果である。

前回の佐賀に続き、日本放射光学会市民公開講座として、今回は「シンクロトロン光で明かす生命と宇宙」を世界物理年協賛事業として開催した。名古屋大学、応用物理学会東海支部、愛知県教育委員会の後援も得た。下村理学会会長のあいさつに続き、分子科学研究所 加藤政博教授に「シンクロトロン光を作る」と題して放射光の発生原理と特徴を解説していただき、物質構造科学研究所 若槻壮



写真7 ちょっと一息コーヒーコーナー

市教授の「生命を明かす」さらに、名古屋大学 田原 譲助教授の「宇宙を明かす」と題して放射光と生命科学や宇宙科学との関わりを講演いただいた。高校生や高校教員、一般市民の方々はじめ、120名の参加を得た。ただ、翌日が平日となる祝日の夕方遅くに講演時間を設定したこと、企画の詳細が決定されるのが遅くて案内が十分に行えなかったこと、口頭発表が平行に開催されたことなど、いくつか反省点もある。次回は、学会行事として他のプログラムとは別に早期に企画を終了するなど、反省を活かし、他の公的機関や教育機関とも協力して有意義な市民公開講座としていただきたいと願う。

今回は、発表申込・参加登録と参加費納入に関してもいくつかの新しい試みがなされた。一つは、参加登録と発表概要に関するものであり、発表申込と同時に発表概要ファイルを提出し、代わりに、申込締め切りが遅くなり、事前に概要集を入手できる方式に変更された。参加費も事前振り込みとなり、シンポジウム当日における事務処理の軽減

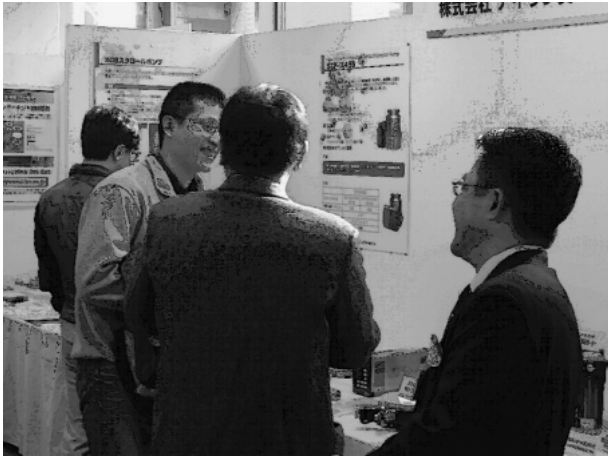


写真8 企業展示における交流



写真10 名古屋のお味はいかが？



写真9 地階ポスター会場

が図られた。実際は、参加者にとっても事務局にとっても初めての方式であるため、かなり戸惑ったり、思い違いをしたりで対応に追われた。賛否種々のご意見や反省点を酌み入れながら、次回以降、方式が定着するにつれて問題点は改善されていくであろう。参加される学会員等のご協力もよろしく願いたい。

また、現地実行委員会は、分子科学研究所極端紫外光研

究施設と放射光ユーザーである名古屋地区の放射光学会員による中部地区合同チームであるが、どちらかという施設主体ではなく、ユーザー主体であったことも特筆することであろう。放射光科学の発展の証である。会場となった名古屋大学東山キャンパスは、2003年12月に地下鉄によるアクセスが可能となった。開催を引き受けた当時建設中であったIB電子情報館は、講義棟を中心に研究会などの催し物が開催できるよう設計され、皆さんに利用していただいた大講義室、講義室、ポスターボード（今回発表件数が多くて使用しなかった）を備えたプレゼンテーションスペース（広い廊下：写真6）の他に、大きな多目的室も用意されるはずであった。残念ながら、多目的室は他の目的に利用されて目論見が外れてしまったが、逆に、コーヒーコーナー（写真7）などの工夫によって企業展示（写真8）やポスター会場（写真9）がコンパクトにまとまった。停電というハプニングもあったが、おおむね無事に終了したのは、関係者の皆様のご協力の賜物である。実行委員会を代表して感謝の意を表したい。

最後に、懇親会には参加者の約半数がお集まりいただいた（写真10）。ここで、次回開催地の実行委員長である広島大学放射光科学研究センター長 生天目博文教授から第20回を記念する大会にしたいと抱負と歓迎の意が述べられた。